

研究テーマ：保健福祉系学生のコミュニケーション能力の育成－課題と支援方法の検討－	
研究代表者（職氏名）：講師 小澤由嗣	所属：保健福祉学部コミュニケーション障害学科
共同研究者（職氏名）：助手 長谷川純，教授 吉畑博代，教授 玉井ふみ，講師 山崎和子，助手 小山美恵	

【はじめに】

コミュニケーション能力は、保健福祉職が業務を遂行する上で不可欠な力といえる。一方で、将来、保健福祉職として社会に貢献したいという意志を持ちながら、他者とのコミュニケーションに対して苦手意識を持つ学生が増えている。本学コミュニケーション障害学科が在学学生を対象に行ったアンケート調査においても、学外実習で困ったこととして、コミュニケーションを挙げる学生が年々増加している。今回、われわれは学生のコミュニケーション能力の向上を支援する一方法として、アサーション・トレーニングを主体としたコミュニケーションスキルアップ講座を実施し、その有効性を検討した。

【方法】

<アサーション・トレーニングについて>

アサーションとは「自分も相手も大切にしたい自己表現」と定義されている（平木，1993）。アサーション・トレーニングは、自分の考えを相手に押しつける攻撃的な表現や、反対に非主張的な表現方法ではなく、自分の意見や気持ちを率直に、その場にふさわしい方法で表現することを学ぶことを目指すもので、理論の講義と小グループでの演習から構成されている。公開されているプログラムには、会社員など一般の受講者のほか、医療・保健・福祉従事者の参加も多く、その有効性が示されている。今回はこのアサーション・トレーニングを保健福祉職をめざす学生に対して実施し、受講前後の変化を定量的・定性的な方法で調査した。

<対象>

本学コミュニケーション障害学科2年次生31名のうち、希望者26名。

<トレーニングの実施方法および変化の測定>

講座は、学内において本年2月に2日間にわたり、日本・精神技術研究所認定のトレーナーを招き、一般向けとほぼ同内容のアサーション・トレーニングを実施した。実施前に、受講の動機についての記述式アンケートと、アサーティブ・マインド・スケール（伊藤）、特性的自己効力感尺度（Sherer・成田）、相互作用不安尺度（Leary）の測定を実施した。また講座終了直後に、受講後の感想、気づきについてのアンケートへの記述および上記の3つの尺度の事後測定を行った。

【結果と考察】

アサーティブ・マインド・スケール、特性的自己効力感尺度については、講座実施後に得点の有意な上昇がみられた。また、相互作用不安尺度については、講座実施後に得点の有意な低下がみられた。この結果から、本トレーニングの受講が学生のコミュニケーションに対する姿勢や行動の変化、自己効力感の向上およびコミュニケーションに対する不安の軽減に影響を与えることが明らかになった。

受講後の感想・気づきについては、「自分のコミュニケーション行動の傾向や課題が分かった」「アサーティブな表現の大切さ（良さ）に気付いた」「アサーティブな表現ができるようになりたい」などの記述が多くみられ、自分自身のコミュニケーションに対する認識を深めたり、課題を把握するために、本トレーニングが有効であることが示された。